

神奈川県における 視覚障害者レクリエーションの展開（3）

— フロアバレーボール（盲人バレーボール） —

- 塩沢哲夫（神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢ライトホーム）
- 渡辺文治（神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢ライトホーム）
- 末田靖則（神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢ライトホーム）
- 古畑英雄（社会福祉法人 光友会 藤沢障害者自立生活援助センター）

キーワード：視覚障害・スポーツ・フロアバレーボール・盲人バレーボール

1. はじめに

卓球・バレーボール・ソフトボールは、学校体育のみならず地域のスポーツとしても一般的であろう。視覚障害者においても盲学校や三療（按摩・マッサージ・指圧、ハリ、灸）養成施設などで、体育の時間に盲人卓球・フロアバレーボール（盲人バレーボール）・グラウンドソフトボール（盲人野球）が行われ、運動の楽しさやグループワークの大切さなどを味わっている。フロアバレーボールは、視覚障害の特性から視覚の程度によって役割を分担している競技の一つである。全盲はアイマスクをして前衛競技者となり、弱視は保有視覚を活用して後衛競技者となり各々力を発揮するのである。しかし、それは在学・在所中に限られており、卒業後社会人となってからは楽しむ機会が少なかった。

神奈川県では、1981年の国連障害者年に「完全参加と平等」のスローガンにもとづく「共に生きる社会」の実現として、視覚障害者と晴眼者（健常者）が一緒にプレーしたり対戦したりする機会をつくった。それが「第1回神奈川県盲人バレーボール大会」である。晴眼者が全盲と同じくアイマスクをして、前衛になったり、後衛に女子を加えるなど、共に楽しむスポーツとして現在も継続しており、競技者数も増えている。

本報告では、神奈川県におけるフロアバレーボールの現状と課題を中心に述べる。

2. フロアバレーボールとは

(1) 施設と用具

- コート…18m×9mの広さでその外方を3mのフリーゾーンで囲む。
- ボール…丸くてなめらかな2本のボールにラバーなどを巻く。
- ネット…上部と下部に10cm幅の白帯を二つ折にしてその中に柔軟なワイヤーを通す。
- ボール…日本バレーボール協会公認5号。内圧0.4-0.45kg/cm²
- アイマスク…前衛競技者は目隠しのため常に着用する。

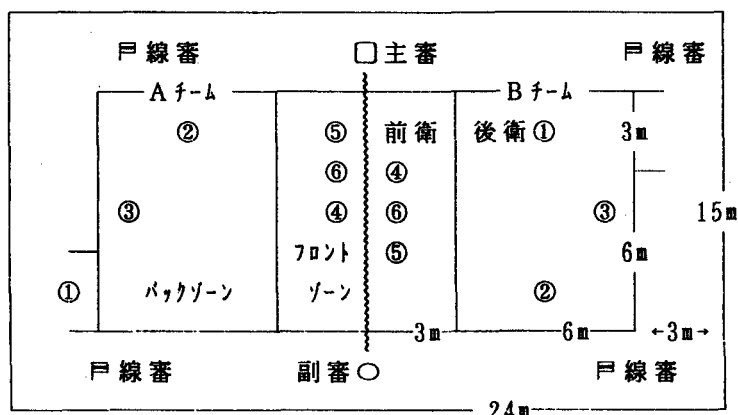


図1 コートとプレイヤーの位置

(2) ゲームの方法

ネットを挟んで向かい合うチームとチームとが、ボールを平面である床の上を転がし、床から30cmに張ったネットの下を通過させ、決められた回数以内で、相手コートにボールを打ち返し、得点を競い合う集団的スポーツである。6人制バレーボールの競技規則に準じる。サービス時は片手の握りこぶしで打つが、レシーブやラリーは両手か片手でいずれも手を握った状態で打つ。前衛競技者は、アイマスクをし、サービスやラリー中などボールを打つときは、反対側の手をボールに添えて打ってもよい。また、サービス時においては、サービスの方向を手ばたきなどで指示を受けることができる。サービスは、1本制でボールをサービスゾーン内の床に静止するように置き、主審の吹笛後自分のサービス番号を告げてボールを打つ。AチームがサービスでBチームがレシーブのときは概ね図1のようなポジションとなる。ローテーションは、後衛競技者と前衛競技者が同時に、ライトはセンターへ、センターはレフトへ移動し、レフトからライトへ移動した競技者がサービスを行う。後衛競技者はフロントゾーンへ入ってプレーすることはできない。1ゲームは3セットで2セットを先取したほうが勝ち。1セットは最小限2点差をつけて15点先取したほうがセットの勝者となる。得点となるのは、サービス権のあるチームが攻撃に成功するか相手が反則をした場合である。

主な反則としては次のようなものがある。

- ・ホールディング…手を開いてボールを打ったとき。
後衛競技者が一時的にボールを静止させたとき。
前衛競技者が3秒以上ボールを静止させたり、ボールを移動させたとき。
- ・ドリブル…同一後衛競技者が連続して2回ボールに触れたとき。
前衛競技者の打ったそのボールに同一人が続けて触れたとき。
- ・イレギュラーヒット…後衛競技者の膝から下の部分にボールが触れたとき。
- ・オーバーゾーン…後衛競技者がバックゾーン外に完全に出たり、フロントゾーンに触れた状態でボールをプレーしたとき。
- ・ボールアウト…ボールがバックゾーンに触れないで、サイドラインあるいはエンドラインを通過したとき。
- ・ストップボール…ボールがコート上で停止したとき。
- ・その他…オーバータイムス・パッシングザセンターライン・オーバーネット・タッチネットなどがある。

サービス権のあるチームが失敗や反則をしても相手の得点にならず、サービス権だけが、相手に移る。ただし、最終第3セットはサービス権の有無にかかわらず得点となるラリーポイント制で行う。

3. フロアバレーボールの経過と現状

(1) 競技者について

1981年に、「第1回神奈川県盲人バレーボール大会」が行われ、第14回大会までの参加競技者は総数で2543名である。

表1に、競技者の割合を比較し示した。神奈川県盲人バレーボール大会を便宜上1～7回大会までを前期とし、8～14回大会を後期とした。後期で減少が見られるのは、晴眼

男子と全盲男女の割合である。増加しているのは、晴眼女子と弱視男女である。

表1 区分別競技者の割合 (前期と後期との比較) (%)

		晴眼	視覚障害者			計	備考
			全盲	弱視	小計		
前期 1～7回 大会	男	21.7	29.3	25.0	54.3	76.1	1回平均競技者 161.3人 平均 12.7チーム 参加競技者1129名
	女	13.7	6.5	3.7	10.2	23.9	
	計	35.4	35.8	28.7	64.5	100.0	
後期 8～14回 大会	男	20.7	27.0	27.6	54.6	75.0	1回平均競技者 202.0人 平均 15.3チーム 参加競技者1414名
	女	14.8	5.5	4.8	10.2	25.0	
	計	35.5	32.5	32.4	64.8	100.0	

表2 区分別競技者数 (1回大会と14回大会の比較) (人)

		晴眼	視覚障害者			計	備考
			全盲	弱視	小計		
1回 大会	男	19	39	24	63	82	8チーム参加 1チーム平均13.6名
	女	21	3	3	6	27	
	計	40	42	27	69	109	
14回 大会	男	46	58	60	118	164	16チーム参加 1チーム平均13.4名
	女	26	8	17	25	51	
	計	72	66	77	143	215	

(※割合および平均は、小数点2位を四捨五入)

表2の1回大会と14回大会の競技者数を比較してみると、全盲男女は共に若干増えている程度であるが晴眼男子と弱視男女の増加の割合は高い。

14回大会では、参加チーム数が倍になったため総数も倍になったが、1チームの平均人数にそれほど変化は見られない。それは、選手登録枠が監督・コーチの2名と選手15名に限定されており、チームによっては選手が監督・コーチを兼任しているためでもある。著しい増加が見られるのは、晴眼男子と弱視男女である。この増加傾向は、1991年の11回大会からで、座間市で「第1回全国盲人バレーボール選手権大会」が開かれた年でもある。その大会目的は、全国ルールの普及と視覚障害者の体力向上と親睦であり、選手は身体障害者手帳を有している者である。そのため弱視男女が集まった。また、それ以前の1987年には、年間を通じて試合を楽しみたいという声を受け、リーグ戦が始まり、神奈川県外近隣からの参加も含め徐々にチーム数やメンバーが増えていった。

神奈川でフロアバレーボールが盛んになった理由として、次のようなことが考えられる。

- ①盲学校や三療養成施設などで、体育の時間やクラブ活動として行われている。
- ②生活訓練施設などでは、訓練の一環として行われている。
- ③全盲と弱視の役割がそれぞれ確立され、両者が楽しめる。
- ④動きが激しく、運動量も多いので、若年層が満足できる。
- ⑤全盲・弱視・晴眼者で、かつ男女混合チームなので、チーム編成が比較的容易である。

- ⑥他地域にチームや大会が少なく、神奈川県外からもチームが集まった。
- ⑦大会事務局や審判員が整備され、運営面での機能が整ってきた。
- ⑧ルールが統一され、全国大会が開催されるようになった。
- ⑨借用できる体育館および専用のボールやネットが増えてきた。
- ⑩屋内競技なので予定通りの試合が計画的に組める。

(2) 参加チームについて

参加チームの特徴は、概ね次のようなグループに分けられる。

- ① 盲学校の卒業生を中心としたチーム。
- ② 視覚障害者関係施設の職員・利用者および盲学校の教員・生徒を中心としたチーム。
- ③ 障害者体育施設を利用している障害者とボランティアを中心としたチーム。
- ④ 地区の視覚障害者協会などを主に近隣の人達が集まって構成されたチーム。

以上4グループの中に第14回大会参加の16チームを当てはめると、①と②は共に5チーム、③と④は共に3チームである。そして、①と②は視覚障害者の割合が多く、③と④は視覚障害者と晴眼者とが大体半々である。

(3) 競技環境について

○設備等…神奈川県内では、障害者を対象とした体育施設が9ヶ所あり、ボール・ネットの数は、一般体育館や福祉施設などでも用意され13組位ある。

○サポートする人間…チームにより若干の相違はあるが、全盲・弱視が中心となる盲学校出身者のチームか、施設職員やボランティアなど晴眼者のいるチームであるから、練習計画や試合会場への移動などはすべてそれぞれのチームで行っている。

審判員による競技の判定は、視覚に障害のある競技者や応援者にもわかるように、笛と宣告用語を用いて知らせるが、特殊な競技であるためルールに精通した審判員を養成しつつ、増員にも努力している。

4. おわりに

視覚障害者と晴眼者が一緒のチームでプレーして14年が過ぎた。その間主催として携わっていた行政に代わり、1995年に、障害者自身が主体的に運営していく、「神奈川県フロアバレーボール協会」が設立され、活動を始めた。これで行政の関わりがなくなった訳ではない。これからも競技環境などについて行政の支援を得ながら、視覚障害者と晴眼者がフロアバレーボールを通して心身の鍛錬を行うと共に、参加チームの交流を図り、さらに充実した「共に生きる社会」を築き上げて行くことであろう。

〈参考文献〉

- ・渡辺文治 塩沢哲夫 末田靖則（1992年）：神奈川県における視覚障害者のレクリエーション（2）－視覚障害者と晴眼者とがともに楽しむスポーツ・盲人バレーボール－：第1回視覚障害リハビリテーション研究発表大会：162～165
- ・渡辺文治（1992年）：視覚障害者のレクリエーション 盲人バレーボール：視覚障害119号：41～49